

ゲイリー・スナイダー

(GARY SNYDER) と仏教

—寺院との関係について—

田 中 泰 賢

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)

(1) 序

チェンバレン (Basil H. Chamberlain) は1850年に生れて、1935年にその生涯を閉じたイギリスの日本学者であった。1886年 (明治19年) から東京大学で言語学と日本語の講義を4年間担当している。1911年に日本を去るまで、彼の日本研究はめざましく、多くの業績を残している。『万葉集』、『古今集』、芭蕉の俳句等を翻訳して、日本の詩歌を広く世界の人々に紹介するといった詩人の横顔も見せている。

ところで佐伯彰一は1つの仮説を出している。氏は「芝の寺院に住み込んだというのも、幸福な偶然、日本研究に彼をのめり込ませる強力な誘因の一つとして働いたと思われる。」¹⁾と述べて、チェンバレンの日本研究に寺院の及ぼした影響を重くみているのである。ちなみに、チェンバレンが寄寓したその寺は東京にある曹洞宗の青龍寺であったという。

さてアメリカの中堅詩人として活躍しているゲイリー・スナイダー (Gary Snyder) は1930年にアメリカで生まれ今日に及んでいる。彼は宮沢賢治の『春と修羅』の一部を彼の詩集『奥底の国』(*The Back Country*) で、寒山の詩を『捨て石と寒山の詩』(*Piprap, & Cold Mountain Poems*) で翻訳してアメリカ人に日本や中国の詩を紹介し

* 拙稿に目を通され、貴重な助言、示唆を与えてくださった、東京大学、佐伯彰一教授に心より感謝いたします。

ている。彼は貴重な青春時代を久しい間、京都の相国寺や大徳寺で仏教の修行や研究に励んでいる。アメリカに帰った後も仏教の修行や研究を続けており、それが彼の詩作活動における重要な源となっているように思われる。彼が接触した寺院から啓蒙され、鼓舞されたと仮定しよう。そしてそれが彼の今日のものの見方、生活態度、詩作活動の強力な誘因の一つとして働いたと見なされるなら、佐伯彰一の仮説「寺院の誘因性」は補強されるのではなかろうか。

現代に於いてはとかく寺院は軽視されがちであり、悪い面だけがいたずらに強調されているのが現状のようである。大正時代に於いても、それがうかがわれる。「僕は僧侶というもの寺院というものが今日あるということが、すでに根本的に誤まっているのじゃないかという気がするのだ。」²⁾と宮城は厳しく断罪している。この言葉に謙虚に耳を傾けたいと思う。しかし余りにも宮城の批判は短絡すぎるような気がするのである。

(2) 発 心

言うまでもなくアメリカはキリスト教の国であって、仏教は少数派に属する。その少数派の側に立つスナイダーはこう述べている。

My own personal discovery in the Zen monastery in Kyoto was that even with the extraordinary uniformity of behavior, practice, dress, gesture, every movement from dawn till dark, in a Zen monastery everybody was really quite different. In America everybody dresses and looks as though they are all different, but maybe inside they're all really the same. In the Far East, everybody dresses and looks the same, but I suspect inside they're all different.³⁾

彼は京都の禅寺に在る僧堂〔僧侶の修行する道場〕で驚くべき発見をしたのである。僧堂では常に僧侶の服装、修行の方法等といった外面的な部分は同一化されているにもかかわらず、彼等が一人、一人異なる

っていることだった。彼等は<個性>豊かであり、生きている人間を漂わせていた。それに反して、彼の母国、アメリカは各々勝手な服装をしているので外面的には異なっているように見えるが、内面的にはどの人も<画一的>であった。その理由の一つには彼等の歴史にあった。彼等の祖先はアメリカの植民であったから、原住民のアメリカ・インディアン〔この用語は原住民に対して適切ではないが〕と闘い、黒人を管理する為には、一致団結しなければならなかった。敵対心を是とし、一致団結する為にはどうしても<画一的>でなければならなかったのである。自らの繁栄の為に、原住民を大量に虐殺し、黒人を牛馬の如くに扱って来た暗い歴史が彼等を内面的な<画一化>に追いやったのである。だからその内面的に<画一化>することによって、彼等は自らが仮想した敵に対する恐怖と不安を取り除こうとしたのであると考えられる。

だからスナイダー自身が無意識に<画一化>されていたことが、寺院の<個性>豊かな僧を見る事によってわかったのである。これは彼にとっては大きな衝撃であったろう。当たり前としていた事がそうでないとわかった時のショックが彼にとって一つの転機となったに違いない。彼が証言しているように、寺院の僧の<個性>豊かな生活を見て、新しい人間像を知ったのである。だがスナイダーのように固定化されている、内面的<画一性>を否定して少数派の立場からアメリカ人の犯してきた多くの罪を深く反省しようとする者は、村八分的孤立感と苦しみに耐えていかねばならない覚悟が必要であったと思う。なぜなら、彼の反省はアメリカ人に<画一性>の崩解という不安を与え、裏切り者として映るからである。では一体、彼の見た寺院での僧の<個性>とは何であるのか。そしてそれはどこから培われたのであろうか。

ところで彼は少年の時を回想して次のように語っている。

When I was eleven or twelve, I went into the Chinese room at the Seattle art museum and saw Chinese landscape paintings; they blew my mind. My shock of recognition was very simple: "It looks just like the Cascades."

The waterfalls, the pines, the clouds, the mist looked a lot like the northwest United States.⁴⁾

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)
彼が育った所は自然そのままの状態を保ち、彼は自然を友として大きくなったようである。彼の父は小さな酪農を営んでおり、彼等白人のまわりにはアメリカ原住民が生活していた。サリッシュ族 (Salish) というアメリカ原住民の老人がシアトル (Seattle) で小さな農業で生計を立てているスナイダーの家族にしばしば鮭を売りにきたという。だから彼の世界観は白人と原住民と自然の三つから成り立っていた。彼の自然への親しみと原住民への思いやりが融合して、幼ない頃から優しい心を持った感受性の強い少年であった。

彼は11, 2歳の時にシアトル美術館で観賞した中国の風景画に気が動転したと語っている。何故なら、彼がよく遊んだカスケード山麓 (Cascade) の風景と余りにも似ていたからである。その風景画に描かれていた滝、松林、空に浮かぶ雲、霧はアメリカの北西部に開発されないまま残っている自然と非常に似ていた。原住民によって守られてきた自然と中国の風景画の奇妙な共通性に彼は気づいて、そこには偽りのない、ありのままの姿が見られた。その風景画に〈真実性〉をみてとった彼は中国の世界観に興味を持ち始めていったのである。従って彼は少年の頃から、もしまえの豊かな感受性とその中国の風景画が相俟って、すでに東洋へ目を向けながら、その〈真実性〉を掴もうとしていたのである。エズラ・パウンド (Ezra Pound) やアーサー・ウェィリー (Arthur Waley) 翻訳の中国詩、中国やインドの古典等々の翻訳書を読んだり、仏教書を通して瞑想を行なったりしていたが、それだけでは〈真実性〉に近づく事が困難であった。彼はその真実性に出会うためにはどうしても東洋の国に行き、正しい指導を受ける必要性を覚えたのである。その東洋の国に行く為に語学や文化の勉強を始めるのである。中国へのあこがれが強かったようであったが、しかし彼は中国に行くことを断念してこう語っている。

Then I learned that this tradition is still alive and well in Japan. That convinced me that I should go and study

in Japan.⁵⁾ 禅の伝統が日本にはまだ生きていたことを知ったので彼は日本に行く事を決意したのである。彼は木材の切出し、見張番等の仕事で日本行きの渡航費を捻出したという。26歳の春に船で日本にやって来たのであるが、その時の彼の心境は全くの異国に対する不安と期待とが入り混じったものであったろう。長い航海の途上、果てしなく続く大海原の向うにある東洋の国を色々と想像しては〈真実性〉への思いは胸ふくらむばかりであった。

I spent my first year in Japan living in Shokoku-ji, learning Japanese and serving as personal attendant to Miura Isshu Roshi.⁶⁾

そこには決して一時の思いつきや、冷やかし気分は微塵もなかった。ただひたすら真実性を求めて来たといえる。

(3) 出 会 い

彼は先ず、京都の相国寺の林光院で三浦一舟老師^{しょうせん}に相見する。三浦老師が彼にとっては最初の東洋の指導者であった。老師との出会いは1年余りの短かいものであったが、個人的な弟子〔正式な弟子ではなかったろう〕として鉄槌を受けた。印象が大きかったと見えて考師の夢を見て「ある夜、私は三浦老師と一語にいて、バークレー (Berkeley) を見ていたが、それは夢であった。」⁸⁾と述べている。スナイダーは老師を評して「老師は本当に〈地味な〉人であった。」⁹⁾と述べている。スナイダーは夢の中で、母国アメリカを心配そうに見ているが、物静かな老師のまなざしと態度に触れて安堵感を覚えたのである。三浦老師がアメリカへ伝道の為出発するにあたり、老師から大徳寺龍泉庵の小田雪窓老師を紹介してもらい、その後、長い間、小田老師の下で本格的な仏教修行と研究が始まるのである。

So I went up to Daitoku-ji, was accepted as a disciple by Oda Sessō, and started going to sesshins and living periodically in the monastery.¹⁰⁾

小田老師との相見の後、正式な弟子として新たに出発していった。大徳寺の定期的な接心会には必らず参禅して、修行僧と一諸に仏道修行を続けたのである。彼が今まで出会ったどんな人よりも「小田老師は実に神秘的な雰囲気^{あふ}に溢れて、最も明敏であった。老師は決して自己の力を人前に誇示することを慎しみ、温和でどちらかという沈黙を保つ人であった。」¹¹⁾三浦老師も小田老師も共に虚勢を避けて、＜地味な＞態度に徹する禅僧である。まさに愚の如く、魯のごとくに、日常生活を戒めていく姿にはあの、スナイダーが感動した中国の風景画に見た＜真実性＞が^{にじ}滲み出ている。ありのままの飾らない老師達の言動がああ風景画と重なって一つになったのである。老師達は物静かで微笑みをたたえた人であった。

金関寿夫は3週間余り、アメリカのスナイダー家に滞在した時の印象から、「スナイダーは議論をすると、いつも論理的で核心をついた話し方をするが、知的な議論に耽ることは明らかに好きなほうではない。夕食のあとなど、議論をするより焚火を囲んで談笑するほうを好んでいる。」¹²⁾と観察している。老師達がそうであったように、スナイダーも又＜地味な＞生き方をしている様子がうかがわれる。スナイダーが物静かな談笑を好むのは、老師達の微笑みを浮かべた＜地味な＞人柄から学んだものと思う。それは釈尊が優曇華^{うどんげ}をつまみあげて、まばたきをすると、摩訶迦葉尊者は顔をほころばせてにっこりしたといわれている、あの「世尊拈華瞬目し、迦葉破顔微笑す」の伝統が引き継がれていることを彷彿とさせるのである。

(4) 菩薩道

スナイダーが求めていた＜真実性＞が寺院の僧達の持つ＜個性＞豊かな人柄と重なり合うことを知った。僧達は決して内面的＜画一性＞に左右されなかった。なぜなら僧達はありのままに心を開け、＜地味な＞態度に徹していたから、そこには微笑みを投げかけて、物静かに出来る余裕があった。

Sitting on mats and drinking tea they relax and smoke

and quietly kid a little, and the Jikijitsu—a tigerish terror during the zazen sessions—is very gentle.¹³⁾

相国寺の接心会の時、緊張した参禅から解放されて、直日〔指導僧〕の部屋でお茶を飲み、くつろぐ一時の喜びがスナイダーを元気づけたのである。坐禅中はまるで虎の如くに厳しかった直日も坐禅が終ると、優しく物静かであった。皆で冗談を言い合って微笑む余裕が坐禅から生まれ、そこにはなんの邪念もなかった。

In actual fact, they're all very human and very different from one another.¹⁴⁾

僧達には非常に人間の〈温か味〉があったし、同時に彼等は各々個性的であった。つまり〈個性的〉とは〈温か味〉の心から由来してくるものであり、表裏一体をなしていることにスナイダーは気付いた。スナイダーが求めていた〈真実性〉とは〈地味な〉生き方をしている僧達の〈個性的〉豊かな人柄であり、いつも微笑みを忘れない〈温か味〉であったと彼は考えたのである。その〈温か味〉とは言い換えれば僧達の〈菩薩〉の心であった。〈菩薩〉は泥まみれになって、よれよれの衣をまとい、汗をたらして地獄の底から苦しみの叫び声を出している亡者に暖かい手をさしのべてくれる。そんな気軽で気さくな〈菩薩〉はにこにこしながら、いつも困っている人の立場になって一諸に苦しんでくれる。菩薩とはそんな方である。

The Bodhisattva lives by the sufferer's standard, and he must be effective in aiding those who suffer.¹⁵⁾

スナイダーは彼自身がかっきりと〈菩薩〉というもののあり方を認識している。苦しんでいる、弱い者の側に立って、彼らと一諸に力を合せて行こうとする決意がスナイダーの言葉「*he must be effective*」から^{ほとぼし}迸り出ている。だから彼は老師達から〈菩薩〉の心を学んだのである。

The giving of a love relationship is a Bodhisattva relaxation of personal fearful defenses and self-interest strivings—which communicates unverbally to the other and lea-

ves them do the same.¹⁶⁾

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)
<菩薩>は人間に愛のふれあいを伝えてくれるものであり、個人の恐怖より生じる警戒心と利己主義な葛藤から人間を解き放してくれる方だとスナイダーも証言している。あのアメリカの内的<画一性>は敵対心と利己的^{あつれき}軋轢から生じていることは述べたとうりであるが、その内的<画一性>は<真実性>から目をそむけるものであった。だから<菩薩>こそ、その内的<画一性>を^{ゆる}緩めてくれる力を持ち、<菩薩>の慈悲の手は人間を互いに表面的言葉よりもっと深遠なレベルで感応道交せしめてくれるのである。

スナイダーの修行時代、小田老師は声も小さくて、聞き取りにくかったが、それは彼が表面的言葉で聞こうとしていたからであった。老師の亡くなった後になって、老師の教えが彼に分かり始めていった。老師は亡き後も<菩薩>道を説き続けていると彼は信じている。<菩薩>の心は言葉を超えて伝えられているのである。良寛が玉島の円通寺で国仙和尚の下で禅の修行をしていた時、国仙和尚は黙々と畑仕事に精を出すのみであった。国仙和尚亡き後、良寛ははじめて国仙和尚の<菩薩>の心がわかり泣を流すのである。その国仙和尚と良寛の言葉を超えた「以心伝心」がそのまま小田老師とスナイダーの師弟の間にあてはまるのである。

inside the hall here it's like a grove of Redwood, or under a mountain. Oda Rōshi made eighteen bows.¹⁷⁾

小田老師は本堂でひたすら五体投地の^{らいはい}礼拝を行なっていた。繰り返される五体投地の礼拝はあたりを神秘的で厳かなものにして、それはスナイダーが小さい頃に出かけて行ったあの森の中の雰囲気と似ていた。そしてあの感動を覚えた中国の風景画の中に居るような感じであった。

五体投地の礼拝とは、おのれの全ての我執を投げ出し、全てを仏に献身するという菩薩道の大切な行の一つである。全ての苦しむ人々に自己を開放していくのである。仏教は本来、世界主義的な視点から全ての人々に門戸を開く教えであるが、それが<菩薩>の心である。全ての生きとし生けるものが救われる為には<菩薩>はどんな労苦も惜

しまずに出かけていく。釈尊は男女の別なく、階級、人種等の一切の別なく、生きとし生けるもの一切を等しく受け入れて、慈悲の手をさしのべて下さっているのである。

スナイダーは僧堂が比較的開放的である点に注目している。内的<画一性>からは決して開放的な心は養われないのであって、<菩薩>の心によって人間は開放的になれるのである。今アメリカの<菩薩>道を修行している人々の半数は女性だという。これは本来の<菩薩>的精神に近づいた姿であり、活気的なものであると思う。

(5) 脚下照顧

スナイダーは朝5時には起床する。5時30分から1時間、丘の空き地に^{ごご}莫座を敷き、^{ざぶ}坐甫を置いて、求道者達と一諸に坐禅を行なう。7時には朝食、そして8時から11時までは^{まむ}作務〔労働〕を行なう。1時から3時までは自由時間であり、3時30分から5時まで再び作務を行なう。6時に夕食をとり、それ以降は自由時間としている。毎週、土曜日には、『六祖壇経』の英訳テキストを用いて研究会を行なっているという。¹⁸⁾ 彼の生活はあたかも僧堂の^{さじょう}差定〔日程表〕の如くに規則的に行われている。彼は相国寺での接心会の体験を次の様に語っている。

Zazen is a very tight thing. The whole room feels it. The Jikijitsu gets up, grasps a long flat stick and begins to slowly prowl the hall, stick on shoulder, walking before the rows of sitting men, each motionless with eyes half-closed and looking straight ahead downward. An inexperienced man sitting out of balance will be lightly tapped and prodded into easier posture.¹⁹⁾

坐禅は自らを引き締める事である。僧堂の中はもう坐禅の熱でみなざり、参禅三昧の空気が全体に伝わっている。坐禅は半眼の状態で背すじをのぼし<脚下照顧>するのである。足の痛みを耐える時のあのつらさが、かえって坐禅への親しみに変っていく不思議さは<脚下照顧>する喜びから来るものであろう。

“Are there really some Americans interested in Zen?” they ask with astonishment—for their own countrymen pay them scant attention.²⁰⁾

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)

日本人自身が関心の少ない仏教にアメリカ人が興味を持つことは、日本人には怪訝けげんに思われたようである。「日本で仏教を研究している西洋人ということでは、なにをいまさらモノズキな、という予断と偏見をもっていただけだが、……」²¹⁾ といったように、スナイダーの真剣な求道精神に対して、疑いを懐いた人は多かった。だが「自家の宝を忘れて、いたずらに西洋の追随や物真似を事とする東洋人の愚を皮肉っているところなどは、笑い事としては済まされないようにも思われる。」²²⁾のである。

(6) 平等性

Roshis in Japan do physical work alongside their monks, still. That has been for them a source of abiding health.

There are other things within the Ch'an administrative structures, within the monasteries, which are quite amazingly democratic when it comes to certain kinds of choices. All of the monks—whether novices or elders—have an equal vote.²³⁾

日本の老師達は若い雲水うんすい達と一諸になって作務を行ない汗を流した。このことはスナイダーに注意を引いたのである。作務の時には一切の上下関係もなく、彼等はお互いに〈平等〉な立場で働いた。初期の中国禅は驚くほど〈民主的〉であったといわれている。何かを取り決めたり、選択を行なう時には、新参者も古老も全く等しく一票を投ずることが出来た。日本の僧堂でもその〈民主的〉なあり方が比較的残っており、〈平等〉な立場を堅持していた。

スナイダーが洪州百丈山懐海禅師の語録²⁴⁾を英訳しているのは百丈懐海禅師の〈民主的〉なありかたに賛同したからであろう。百丈禅師

は「一日為さざれば食うべからず」²⁵⁾ という有名な言葉を残しているが、スナイダーがこの言葉を重く見ているのは、彼の規則的な日常生活に作務〔労働〕を積極的に取り入れていることからしてわかるのである。百丈禅師はともすれば陥りやすい仏教の一部にみられるエリート主義を排する為の自戒の言葉として自らを〈脚下照顧〉したのであろう。百丈禅師は「正邪、美醜、道理・非道理等の一切の分別を離れて、それらに縛^{しば}られない時が自由であり、そのような人が菩薩と呼ばれる」と言っている。

スナイダーは次のような詩を作っている。

As we hoe the field
 let sweet potato grow.
 And as sit us all down when we may
 To consider the Dharma
 bring with a flower and a glimmer.
 Let us all sleep in peace together ²⁶⁾
 (BURNING ISLAND)

拙訳

俺達は畑を耕やし
 さつまいもを作る。
 そして坐る
 花と薄光を友として
 ダルマを想う。
 共に 平和に眠ろう。

坐ることも、立つことも、横になることも、全て等しく、〈ダルマ〉の行であり、〈菩薩〉の道である。百丈禅師の教えは、修行僧の老若、身分の上下なく、皆同じ僧堂の中で生活し、師の部屋に入って教えを受ける時以外は自由であって、強制的なところはなかった。節約を重んじたのは〈ダルマ〉と食とが一致する為であった。もし僧堂の自由や平等を邪魔する者がいたら寺院から追い出したのである。何故なら、

清なる団体を汚さないことはお互いの尊敬心と〈ダルマ〉への探究心を失なわせないためであった。スナイダーは「麻薬などにいかれてぼやぼやしている青年を叱りつける厳しい教師でもある。」²⁷⁾といったように健全な詩人であり、「いつも夜陰にまぎれてこっそりサウナを使うのを知ってても、われわれのそういう感覚を完全に理解していただけること。主義主張をもつ人間にありがちな、あのトゲトゲしい気負いってものが、彼にはまったくくないのね。あれはほんとうに彼のいいところです。」²⁸⁾といったように、彼のもつ百丈禅師の自由で民主的な態度を敷衍^{ふえん}している。つまり百丈禅師は1人の僧のあやまちを他の全ての僧がきびしくそれを非難するのはいけないこととしていた。何故なら、それは自ら、僧団をおとしめ、〈ダルマ〉を亡ぼすことになるからである。このように百丈禅師の教えは、日本の僧堂での生活を通して彼の今日の生活や考え方、詩に反映されているのである。

zokin in buckets of water.
 wipe the long wood beams
 wipe the feet of the Buddha
 wipe under bronze incense stands
 firecrackers boom from the shrine down the road
 five *go* of vinegar, four *go* of sugar
 five *sho* of rice ;
 (SIX YEARS *April*)²⁹⁾

拙訳

バケツの中の雑布。
 長い梁を拭かしていただく
 仏様のみ足を拭かしていただく
 青銅の香炉台下を拭かしていただく
 道下の社からの爆竹の轟き^{やしろ とどろ}
 5合の酢, 5合の砂糖
 5升のお米 ;

隅々まで、ていねいに雑布で拭いていく。誰にも省りみられない梁から、仏様の足に触れて、〈脚下照顧〉の教えを会得していくのである。上下、左右の別なく浄らかにしていく時の喜びが上の詩に感じられるのである。

(7) 自由性

Zen aims at freedom but its practice is disciplined³⁰⁾

禅は〈自由〉をめざしているが、それは決して勝気手ままなものではない。〈自由〉の裏づけが必要であり、それは修行によってこそ生きてくる。禅は自己及び他己の〈自由〉をめざすものであって、1人自分だけのものであってはならない。百丈禅師のいう有為無為の別もなく、からりとした心に徹する時こそ、自由といえるのである。スナイダーはこの禅の〈自由〉な心によってあの〈画一性〉の心を^{ふつよく}払拭したのである。

スナイダーに永平寺参禅の時の詩がある。

next morning rode the sunny hills, Eihei-ji,
got the luggage rack arc-welded
back through town and to the shore,
miles-long spits and dunes of pine
and made love on the sand

(SIX YEARS September)³¹⁾

拙訳

翌朝、日ざしを浴びた丘陵、
永平寺を拝む
網棚は弓形に調和
町に戻り海辺へ、

長い長い砂嘴^{さし}と松の砂丘

砂浜の愛

ゲイリー・スナイダー
(GARY SNYDER) と仏教 (田中)

山深い永平寺には仏法の光が^{さんさん}燦燦と輝やき、調和と平和が織り合わさっている。永平寺から^{そそ}灌がれる仏法の光は大自然の中に恵みとなって働いていく。どんな川の水も辞さない大海原の如くに暖かい慈悲の手をさしのべてくれるのである。

says Dōgen, “everyone of us
has a natural endowment
with provisions for the whole of his life.”
(IN THE NIGHT, FRIEND)³²⁾

スナイダーはここで道元禅師の「一切衆生には、悉く仏性がある」言葉を引きしている。衆生の外も内も、悉くが仏性である。何故なら、それが全ての思慮分別を超えて、何ものとも対立しないからである。仏性は本来あるものではない。それが時を超えているからである。

スナイダーは三浦老師から「お釈迦様でさえ、どこかでいまだに修行している」³³⁾と教えられた。スナイダーの永遠の新しさへの目ざめは、三浦老師も小田老師もどこかで、いまだに修行をしているはずだと信じたからにはほかならない。彼は現代の時計的時間を超えた<永遠>なるものを学んだのである。そしてその<永遠>なるものをめざす禅はセクト的、主義的な狭い枠を超えて、道元禅師のいわれる普遍的真理<ダルマ>を単的に示す。だから「禅は、現実において、宗教を超え、しかも、宗教を包むものであると言うべきでありましょう。」³⁴⁾というの正しい。

スナイダーの坐禅による心身一如の境地をめざす態度、そして身、口、意に仏の印を現わして、仏の姿になりきって叫ぶ詩は普ねく世界に仏の印を現わして、一切の虚空は悉く悟りとならしめるのである。「スナイダーの理想は、明らかにこの世に、一つの偉大な「僧伽^{サンギヤ}、すなわち衆生ことごとくが、愛と平和の生活を楽しむ社会を実現するこ

と彼が「コンミュオニズム」と呼ぶものの実践なのである。」³⁵⁾

(8) む す び

スナイダーと寺院との関係について論じてみたが、彼は接触した寺院から様々の影響を受け、啓蒙されたのである。そして寺院で学んだ数々のことが彼の今日の血肉になって、詩作活動、生活態度、ものの見方に反映されている。彼の求道的詩作活動への「誘因」の1つに寺院の働きが評価されるのである。

とすれば佐伯彰一の仮説「寺院の誘因性」は一層、普遍化されて信憑性を帯びることになると思う。

註

- 1) 佐伯彰一、1981『外から見た日本文学』東京：TBSブリタニカ、73頁
- 2) 松岡譲、1981『法城を護る人々上』京都：法蔵館（大正12年刊を底本）319頁
- 3) Snyder, Gary. 1980. *THE REAL WORK*. New York: A New Directions Book. p. 99.
- 4) *Ibid.*, pp. 93-94.
- 5) *Ibid.*, p. 95.
- 6) *Ibid.*, p. 97.
- 7) 林光院、橋本修堂老師からの筆者宛ての手紙〔10月23日 '81 付け〕によると、三浦老師は南禅寺僧堂在錫中に知り合った佐々木ルイスさん〔大徳寺山内に永らくいたという〕の勧めによって渡米するに当り英語の勉強の為林光院に1年余り寄宿していたという。その時にスナイダーは三浦老師に出会っていることになる。広園寺、丹羽慈祥老師から恵送いただいた『覧古遺芳』（広園寺出版、1981）によると、長いアメリカでの布教伝道生活を行なって、1978年（昭和53年）12月10日、76才の時、サンフランシスコで遷化されたという。
- 8) Snyder, Gary. 1969. *Earth House Hold*. New York: A New Directions Book. p. 43.
- 9) 広園寺、丹羽慈祥老師からの筆者宛てに送っていただいた英文資料 (*ON RINZAI MASTERS AND WESTERN STUDENTS IN JAPAN from a tape by Gary Snyder*. p. 28.)
- 10) *THE REAL WORK*: *op. cit.*, p. 97. による。
- 11) *ON RINZAI MASTERS AND WESTERN STUDENTS IN*

JAPAN: op. cit., p. 27. 小田老師が1966年(昭和41年)9月17日に亡くなられる迄, スナイダーは指導を受けている。老師は鳥取県の農家の出身で, 10才の時に禅寺に入っている。老師はしばらく妙心寺の僧堂に安居した後, 後藤老師と韓国に渡っている。スナイダーは老師の最初の外国人弟子で他にも数人の外国人が老師の下で修行をしていたという。大徳寺から筆者宛の書簡〔2月10日, '82〕によると, 老師は大徳寺第五百六世雪窓宗甫, 号は蔵暉室, 1965(昭和30年)第11代管長に就任。世寿65才で示寂されたという。

- 12) 金関寿夫, 1977『アメリカ現代詩ノート』東京: 研究社, 250頁
 13) *Earth HouseHold*: op. cit., p. 48.
 14) *THE REAL WORK*: op. cit., p. 97.
 15) *EARTH HOUSE HOLD*: op. cit., p. 92.
 16) *Ibid.*, p. 34.
 17) *Ibid.*, p. 39.
 18) 金関寿夫, 1977. 『アメリカ現代詩ノート』, 東京: 研究社, 238頁
 19) *EARTH HOUSE HOLD*: op. cit., p. 50. 彼は接心会の体験の詩を作っている。

December

Three a. m. — a far bell
 coming closer :
 fling up useless futon on the shelf ;
 outside, ice-water in the hand & wash the face.
 Kothe bird-head, silent, skinny,
 swiftly cruise the room with
 salt plum tea.

Bell from the hondo chanting sutras. Gi :
 deep bell, small bell, wooden drum.
 sanzen at four
 kneel on icy polisht boards in line:
 Shukuza rice and pickles
 barrel and bucket
 dim watt bulb.
 till daybreak nap upright.
 sweep
 garden and hall.
 frost outside

wind through wa lls

At eight the lecture bell. high chair.
Ke helps the robe—red, gold,
black lacquer in the shadow
sun and cold

Saiza a quarter to ten
soup and rice dab on the bench
feed the hungry ghosts
back in the hall by noon.
two o clock sanzen
three o clock bellywarmer
boild up soup-rice mush.
dingingand scuffing. out back smoke,
and talk.

At dusk, at five,
black robes draw into the hall.
stiff joints, sore knees bend
the jiki pads by with his incense lit,
bells,
wood block crack
& stick slips round the room
on soft straw sandals.

seven, sanzen
tea, and a leaf-shaped candy.
kinhin at eight with folded hands—
single-file racing in flying robesleaning
to wake—

nine o clock one more sanzen
ten, hot noodles,
three bowls each.

Sit until midnight. chant.
make three bows and pull the futondown.

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)

roll in the bed—

black.

A far bell coming closer

ゲイリー・スナイダー (GARY SNYDER) と仏教 (田中)

拙訳 午前3時—遠くの振鈴が
近づいてくる：
布団を素早く押入へ；
戸外の氷のように冷たい水で洗面。
無口でやせた待者は
梅茶を
迅速に堂内へ運ぶ。

本堂から、鐘、読経ツー：
大磬、小磬、木魚。

4時参禅
磨かれた床に—列に正座：

粥座、お粥と漬物
樽とバケツ
薄暗い電球。

夜明けまで—休み。
掃除

庭と堂内。

外は霜

壁を吹き抜ける風

8時法堂。高座。
雲水は衣を整える—赤色、金色、
黒色の漆器、影の中
日光と冷氣

齋座、10時15分前
卓上に少しの汁と飯

餓鬼に供養の為
正午には堂内に戻る。

2時参禅

3時薬石
熱い雑炊。

息を吹きすする。部屋でタバコ、

談笑。

^{たそがせ}黄昏の5時、

黒衣が堂内に近づく。

痛む足を組む

直日^{じきじつ}が線香を持ってそっと歩く、

鐘、

木版^{もくばん}の響き

そして警策は堂内を巡る

わら草履^{ぞうり}をはいて。

7時参禅

お茶と葉形のお菓子。

8時^{きんひん}経行、^{しやしゆ}叉手—

一列で風を切り小走り

目をさますため—

9時更に参禅

10時温いうどん

おかわり3ばい。

真夜中まで坐る。読経。

拝して布団をしく。

丸くなる—

暗闇。

振鈴が近づいてくる

『奥底の国』(The Back Country, pp.67-68)

20) *Ibid.*, p. 51.

21) 片桐ユズル「スナイダーとその東洋的世界」(『ユリイカ』vol. 12-7, 1980) 68頁

22) 安藤正瑛「Jack Kerouac (1922-69)『路上』から『放浪の禅者』へ」(『学術紀要』第34号, 岡山大学, 1974) 12頁。

23) *THE REAL WORK: op. cit.*, p. 105.

24) スナイダーは入谷義高のアドバイスを受けながら、『大正新修大蔵経』第51巻史伝部の「景德伝燈録」巻第6の洪州百丈山懐海禅師(749—814)の箇所(249頁—251頁)を英訳している。それを彼の『地球の家を保つには』(*Earth House Hold*, pp. 69-89)の中に載せている。

- 25) この「一日作さざれば食うべからず」が誤解されてはなるまい。たとい寝たきりの人であれ、身体に障害を持つ人であれ、食べる権利はあるはずである。しかしここで百丈禅師が言っていることは<脚下照顧>の為に自らに言いきかせた言葉である。良寛は「病気の時は病気に会うがよろしく災難の時には災難に会うがよろしい」と述べている。ならば病気も修行であり、作務であるともいえるのではなからうか。そこには決して分けへだてはないのである。
- 26) Snyder, Gary. 1970. *Regarding Wave*. New York: A New Directions Book. p. 24.
- 27) 金関寿夫：前出，250頁
- 28) 金関寿夫：前出，245頁
- 29) *The Back Country*, *op. cit.*, p. 58.
- 30) *EARTH HOUSE HOLD*. *op. cit.*, p. 51.
- 31) *The Back Country*, *op. cit.*, p. 64.
- 32) *Regarding Wave*. *op. cit.*, p. 53.
- 33) *EARTH HOUSE HOLD*. *op. cit.*, p. 133.
- 34) 安藤正瑛，1974. 『禅と基督教人間—このすばらしきもの—』東京：高陵社，142頁
- 35) 金関寿夫，1980. 『ナヴァホの砂絵』東京：小沢書店，118頁

Gary Snyder and Buddhism

—on the relation of Gary Snyder to Buddhist temples—

Taiken TANAKA (Aichi Gakuin Univ.)

Prof. Shoichi Saeki supposes, "A temple in which Basil H. Chamberlain lived functioned with effect as one of immediate causes for his making himself part of the Japanese studies. "in his book entitled *Soto kara mita nihon bungaku* (Japanese literature viewed from an outside angle 1981. Tokyo. p.73.).

Well Gary Snyder spent his youth on his study and practice of Buddhism in Japan. I suppose that temples with which he established his contact may become an important basis of his present poetics. If these temples functioned as one of immediate causes for his present living ways, and writing poetry, this strengthens that supposition of Prof. Shoichi Saeki 'the drive by temples'.